

ハラスメント9割被害

「もうしんどい…。辞め
させてもらえん？」
四万十市の訪問介護事業
所で3年ほど前、ホームヘ
ルパーの女性が足を引きず
りながら退職を訴えてき
た。管理者の男性は、その場
面が忘れられないという。
女性は70代後半。退職の
訴えはこれで6度目だっ
た。日頃から足腰が痛み、
目のかすむ夕方は車の運転
が怖いと訴えていた。

ただ、女性が辞めると勤
務シフトを組むのが難しく
なる。他のヘルパーの負担
も重くなる。それまで3年

「求人出しても誰つちや
あまん」ヘルパーの最年少
は40歳「今おる人が辞めた
ら運営できんなる」。

県内事業所の責任者たち
が一緒に顔をしかめる。訪
問介護業界で最大の課題は
ヘルパー不足だ。
なり手不足の要因の一つ
に、1人で他人の家を訪ね

るといふ、特殊な労働形態
がある。県立大学社会福祉
学部の辻真美講師(55)は
「ひどいハラスメントをす
る利用者もいて、ヘルパー
は恐怖に震えながら仕事に
向かっている」と明かす。

辻講師は週末にヘルパー
として現場に入るなどして
研究。2022年に県内の
ヘルパー31人に行ったアン
ケートでは、9割以上が利
用者からのハラスメントに
遭ったと回答した。
複数のヘルパーが「たた
かれる」「体を触られる」「罵
倒される」といった被害を

経験。「服を引きちぎられ
た」「髪の毛をつかまれ、土
下座を強要された」「鎌を持
って追いかけられた」とい
う事例もあった。

日常の衣食住を支えるこ
ういう仕事内容から「家事勞
働のお手伝いさん」として
低く見る利用者もいる。ヘ
ルパー側も利用者の自尊心

を維持するため、あえて自
分を下位に置き、受け入れ
られようと考えがちになる
という。

辻講師は指摘する。

「何か問題が起こると、
ヘルパーは自分が悪い、我
慢すればいいと、サンドバ
ックのように受け止める。
利用者の人権を守ることば
かりで、自分を守ることが
重要視しなすぎた」

「利用者が望む限り、在
宅生活を支える」「自分がい
なくなったら誰が…」
県内のヘルパーたちは強
い使命感で高齢者らの在宅
生活を支えている。

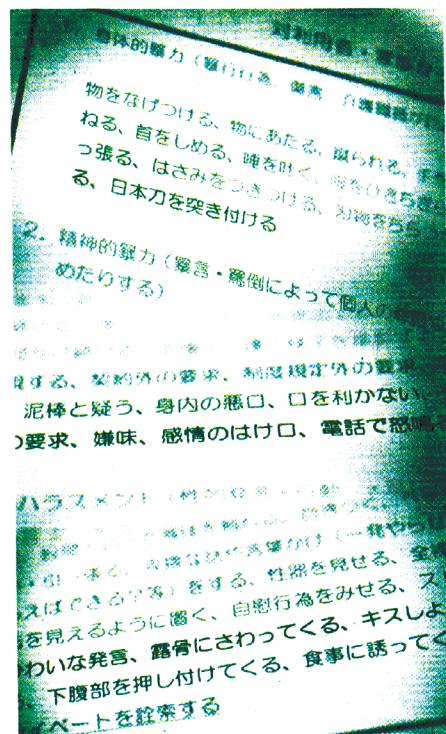
土佐清水市のヘルパーの
女性(49)も身の危険を何度
も感じ、「今担当する利用者

さんが終わったら辞めよ
う」と思いながら長年続け
る一人だ。

「辞めようと思っている
間に、大事な利用者さんが
何人もできる。顔を見るだ
けで元気になる」って待つ
てくれたら救われる。結
局辞められない。涙ぐみな
がら語る。

辻講師はヘルパー向けハ
ラスメントガイドラインの
作成を検討中。基準を明確
にし、声を上げやすい環境
づくりを目指すという。

「ヘルパーの仕事や置か
れている状況を県民に理解
してほしい。労働環境が改
善しなければ、近い将来、
なり手はいなくなり、訪問
介護は破綻する」
(報道部・石丸静香)



県内ホームヘルパーへのアンケ
ート。深刻なハラスメントの実
態が明らかになった